

# 温経湯

温経湯は、後漢の張仲景が著した『金匱要略』に記載された処方である。

## 19 温経湯 (うんけいとう)

半夏・麦門冬各4, 当帰3, 川芎・芍薬・人参・桂皮・阿膠・牡丹皮・甘草各2, 呉茱萸1, 生姜0.5 (g)

**症状治療** 冷え症で手足は逆にほてり、口唇の乾燥感、肌あれ、下腹部の冷え、月経異常などのある場合に適している。また進行性指掌角皮症や湿疹、皮膚癢痒症などにも用いられる。

**長期使用** 「経絡」を「温める」薬の意味。寒冷刺激が持続して経絡の運行が障害されているものに使用される。血行障害、女性ホルモン系の失調を基盤にした不妊、月経痛、主婦湿疹などの体質改善薬として長期投与される。腹診で臍の下部に馬蹄型に抵抗圧痛を触知することが参考になる。

## 温経湯 (うんけいとう)

本方は 金匱要略の婦人雜病門に出ていて、主として婦人の病気に用いられ、金匱要略によると、その目標は月経不順、子宮出血 などがあって、冷え症で、下腹に膨満感があったり、下腹がひきつれたりして、掌には煩熱があり、唇口が乾燥するという点にある。

本方は 芎帰膠艾湯の地黄と艾葉を去ったものと、当帰建中湯の大棗を去ったものと、当帰芍薬散の茯苓、朮、沢瀉を去ったものと、当帰四逆加呉茱萸生姜湯の細辛、木通、大棗を去ったものと、麦門冬湯の粳米、大棗を去ったものと、桂枝茯苓丸の桃仁、茯苓を去ったものなどを一方にまとめたものとみなすことができるから、これらの方意を相互に参酌して、その応用範囲を考えるとよい。

方中の麦門冬、当帰、人参、阿膠には滋潤、強壯の効があり、当帰、芍薬、川芎、阿膠は補血、止血の効があり、半夏は麦門冬と組んで、気の上衝を治し、桂枝、生姜、呉茱萸は新陳代謝をさかんにして寒冷を去り、牡丹皮は桂枝と組んで瘀血を治し、甘草はこれらの諸薬のはたらきを調整する。

本方は 更年期障害、血の道症、不妊症、手掌角皮症、湿疹、流産ぐせ、月経不順、子宮の不定期出血 などに用いられる。

肝疾患

崩門

問うて曰く、婦人年五十所、下利を病みて数十日止まず、暮には即ち発熱し、少腹裏急し、手掌煩熱し、唇口乾燥するは、何ぞや。師の曰く、此の病、帯下に属す。何を以っての故ぞ。曾つて半産を経て、瘀血少腹に在りて去らず。何を以って之を知るや。其の証、唇口乾燥す。故に之を知る。当に温経湯を以て之を主るべし。

温経湯の方  
 呉茱萸(三画)、当帰、芍薬、芍薬(各三画)、人参、桂枝、阿膠、牡丹皮(心を去る)、生薑、甘草(各二画)、半夏(半斤)、麦門冬(二升、心を去る)

右十二味、水一斗を以て煮て三升を取り、分ち温めて三服す。○亦婦人、少腹寒。えて久しく受胎せざるを主る。兼て崩中去血、或は月水来たること過多、及び期に至つて来たらざるを治す。

〔注〕原文に「兼取」とあるのは「兼治」の誤りと考えられるので、「兼て……を治す」と訓むことにした。

〔訓〕

右十二味。以水一斗。煮取三升。分温三服。○亦主婦人少腹寒。久不受胎。兼取崩中去血。或月水来過多。及至期不来。

呉茱萸<sup>三画</sup> 當歸 芍藥<sup>各二</sup> 人参 桂枝 阿膠 牡丹皮<sup>去心</sup> 生薑 甘草<sup>各二</sup>  
 夏<sup>半斤</sup> 麥門冬<sup>去心</sup> 半

温経湯方

問曰。婦人年五十所。病下利。數十日不止。暮即發熱。少腹裏急。腹滿。手掌煩熱。唇口乾燥。何也。師曰。此病屬帶下。何以故。曾經半産。瘀血在少腹不去。何以知之。其證唇口乾燥。故知之。當以温経湯主之。

半夏・麥門 各五・〇 當歸 三・〇 川芎・芍藥・人參・桂枝・阿膠・牡丹皮・甘草  
各二・〇 乾生薑・吳茱萸 各一・〇

〔応用〕 氣血虚して(元氣が衰え、貧血している)、寒冷を帯びる諸婦人病に用いる。すなわち、本方は主として月經不順・帶下・子宮出血・不定期出血・血の道症・更年期障害(のぼせて足冷えるもの)・子宮發育不全・不妊症・流産癖・神経症・凍瘡・乾癬・手掌角皮症・手掌煩熱し、あるいは乾燥するものなどに多く用いられる。その他下痢・月經時に下痢するもの・上顎洞化膿症・虫垂炎等にも応用されることがある。

本方は類聚方広義や、皇漢医学には掲げられていないが、比較的応用面が広いものである。

〔目 標〕 少陰病に属し、陰虚証のもので、婦人雜病門に掲げられている。氣血の虚と寒冷が主目標で、手掌の煩熱(ほてり)と口唇の乾燥、下腹部の膨満感または不快感があり、その他月經不順・帶下・不定期出血・子宮出血・腰部の冷え・腹痛・下痢・のぼせ・嘔氣・咳嗽等の症候のいずれかを参考目標とする。脈も腹も力のないものが多い。腹中に腫塊がないことが条件である。

〔方 解〕 芎歸膠艾湯の附方とされているが、さらに當歸四逆加吳茱萸生薑湯・當歸芍藥散・桂枝茯苓丸等の意味をも含んでいるといわれている。當歸・芍藥・川芎は血虚貧血を治し、阿膠・麥門冬は血の枯燥を潤し、人參・甘草は氣の虚を補い、吳茱萸・生薑・桂枝は冷えを去ってよく身体を温める。半夏は帶下を治し、また嘔逆を止め、麥門冬とともに上衝を引き下げる。牡丹皮は下腹部の瘀血をめぐらすはたらきがある。これらの配剤によつて、冷えを去り、氣血を補い、諸症を治するものである。

## 〔主治〕

金匱要略(婦人雜病門)に、「問フテ曰ク、婦人年五十所、下利(下血の誤りともいう)ヲ病ミ、数十日止マズ、暮レバ即チ發熱シ、少腹裏急腹滿、手掌煩熱、唇口乾燥スルハ何ゾヤ。師ノ曰ク、此ノ病帶下(広く婦人病のこと)ニ属ス。何ヲ以テノ故カ、曾テ半產ヲ經テ、瘀血少腹ニ在リテ去ラズト。何ヲ以テカ之ヲ知ルト、其証唇口乾燥スルガ故ニ之ヲ知ル。當ニ温經湯ヲ以テ之ヲ主ルベシ」とあり、

また「婦人少腹寒エ、久シク胎ヲ受ケザルヲ主ル。兼ネテ崩中去血(子宮出血)或ハ月水来ルコト過多、及ビ期ニ至ルモ来ラザルモノ之ヲ主ル」とある。

〔注〕 下利は下血の誤りとする説がある。下血の方がよく了解される。帶下は婦人病一般の意味も含まれている。勿誤方函口訣には、「此方ハ胞門虚寒(子宮の機能が衰えて冷えている)ト言フガ目的ニテ、凡ソ婦人血室虚弱

(子宮機能の虚弱)ニシテ、月水不調、腰冷、腹痛、頭疼、下血、種々虚寒ノ候アル者ニ用ユ。年五十二云々ニ拘ルベカラズ、反テ方後ノ主治ニ拠ルベシ。又下血ノ証、唇口乾燥、手掌煩熱、上熱下寒、腹塊ナキ者ヲ適証トシテ用ユ。若シ癥塊(腫塊)アリ、快ク血下ラザル者ハ桂枝茯苓丸ニ宜シ。其ノ又一等重キ者ヲ桃核承氣湯トスルナリ」とある。

また古方彙纂には、「婦人で下腹が吊り、腹が張り、手足がほてって、唇の燥き、或は裂る者、或は其れで下利幾日も止まない者、月經が不順であったり、無かつたりする者、或は月經の量が多過ぎる者、或は冷え症のため長く妊娠しない者、冷え症にて頭痛し、月經不順の者に宜し」とよく平易に述べてある。

## 〔鑑別〕

○当歸建中湯<sup>88</sup>(煩熱・足温、咽口乾燥、腹中刺痛) ○三物黄芩湯<sup>50</sup>(煩熱・四肢煩熱) ○當歸芍藥散<sup>107</sup>(不妊症、冷え症・手掌煩熱、口唇乾燥がない) ○八味丸<sup>116</sup>(煩熱・足心煩熱、渴、臍下不仁)

## 〔治 例〕

(一) 鼻閉塞と頭痛・手掌角皮症

(二) 濕疹と不妊症

(三) 更年期不定出血(子宮癌類似症)

[3] 和田泰庵方函／和田東郭(1744～1803年)

- 1) 温経湯の症は肝腎が虚損し、任脈水分の動榮が甚だしいものには地黄、薯蕷を加えて用いるとよく、これは私の数々経験したところである。
- 2) 温経湯は、婦人の小腹に血塊があり痛み、あるいは腹満裏急、発熱、五心煩熱、唇乾燥、あるいは赤白帯下が連綿として絶えず、あるいは大便下利、あるいは秘結するものを治す。

[4] 校正方輿輒／有持桂里 (1758～1835年)

婦人が50歳くらいになり、数10日も下血がやまないものは内に旧瘀血があるためであるが、その中に桂枝茯苓丸、桃核承気湯の症ではない別の一症があり、そのために設けられたのが温経湯である。この症はその熱状と年数とを考えて用いるべきで、あとの活用は医師の胸中にある。

[5] 梧竹樓方函口訣／百々漢陰 (1773～1839年)

温経湯の症は産後に多く、およそ産後の下痢に会った場合は、まずこの方を擬してみるのを常席とする。その症は下利があって、虚熱のために唇口が乾く、手足の心のほてりが強い、腹満などがあり、時に嘔吐不食などの症もある。また産後に限らず老婦の下利が日久しくやまぬ時に用いてよいことがあり、婦人の漏下で日久しく腰痛するものにも効がある。この主治は「千金方」や「婦人良方」などにもあるように思う。

[6] 勿誤薬室方函口訣／浅田宗伯 (1815～1894年)

温経湯は「胞門」虚寒が使用目標で、婦人が血室虚弱で月水不調、腰冷、腹痛、頭疼、下血など、種々虚寒の候があるものに用い、50歳うんぬんには特にこだわるべきではなく、かえって方後の主治②に従うのがよい。また下血の証で唇口乾燥、手掌煩熱、上熱下寒し、腹塊のないものを適証として用い、もし瘕塊があり快く血が下らないものは桂枝茯苓丸がよく、さらに一段と重症のものには桃核承気湯を用いる。

[7] 先哲医話／浅田宗伯 (1815～1894年)

婦人で経水不調、小腹冷氣、瘀血に属するものに奇効がある。(福井楓亭)

[1] 古方節義／中島保定 (年代未詳, 本書の序文に1769年の記載あり)

按ずるに婦人が49歳を過ぎて任脈が虚し、大衝の脈が衰え、笑癡<sup>ハハ</sup>が<sup>ツ</sup>竭て地道が通じなくなり下利するものは下血である。下血が数10行もやまず多量に下る時は陰を亡ぼし、陰が虚すると夕暮に発熱するのである。任衝の脈は皆小腹に起こるので、任衝が虚すれば小腹急となり、内に乾血があれば小腹満となる。また陰虚となれば火盛となって手掌が熱し、血虚すれば唇口を潤せなくなって乾燥する。婦人が50歳になりこの病がある時は帯下に属し、これはその人が過去に半産を経験し、乾血があつて小腹に着いて去らないためである。また半産をすると任脈が傷れ、その上に49歳を越えると任衝が竭て唇口を養うことができなくなり、そこが乾燥するのである。またこの場合は瘀血があることを承知すべきで、その故に温経湯によってこれを調えるのである。

この方の呉茱萸、当帰、川芎、桂枝は皆温薬であり、それで温経と名づけたのであり、瘀血は温を得れば行るのである。方内はすべて氣血を補養する薬で、瘀血を逐うのではなく、瘀血がおのずと去るようにしむけるのであり、いわば正を養えば邪はおのずから消えるの理である。そこで婦人の崩淋<sup>ト</sup>がやまぬもの、あるいは胎孕<sup>ハハ</sup>せぬもの、あるいは月事が調わず帯下がやまぬものは、すべてこの方を主とすべきである。

[2] 方読弁解／福井楓亭 (1725～1792年)

1) 温経湯は経水が過多もしくは来らず、小腹の冷氣に因って瘀血のあるものに用いる。そもそも婦人の病は経水の順否を問うことが第一である。また身体が肥満するものは平素から経水が少なく、綽<sup>ハハ</sup>態<sup>ハハ</sup>のものは経水が多い。何故かといえば、経水が少ないものはその血が順行せず、身体にあふれて肥満せしめ、必ず病が多く、経水が多いものはその血がよく順行するために綽態となり、必ず病は少ないのである。

2) 帯下があつて発熱、小腹急痛、経候不調のものに温経湯が効くことがあり、「万病回春」では千金調経湯と名づけている。

小建中湯  
口燥  
唇乾  
煩熱  
虚してはるる

寒  
虚寒  
手足の冷  
三物茯苓湯  
薬丸

任脈

[10] 橘窓書影／浅田宗伯 (1815～1894年)

- 1) ある婦人が旧疾を發し、以前に用いた方を与えたが治らず、淡飲が游痛<sup>ユウツク</sup>して心下から脇下に至り、宿鞭が甚だしく脈沈遅である。千金前胡湯<sup>①</sup>を与えると、痛みは数日で減り心下は開豁した。しかし手掌煩熱、一、腰腹拘急を覚えたので、温経湯を与えると諸症は全治した。
- 2) ある婦人が平素から虚弱で胞門虚寒の証があり孕育しなかったが、私が温経湯を与えると半年で初めて懐妊した。(以下略)
- 3) 60歳の妻女が経水が断ぜず、時に汚水を漏下し、腰が氷鉄を帯びたごとく冷え、医師は皆帯下で不治とした。診ると身に寒熱なく、脈は虚数でなく陰中に疼痛なく、下物に悪臭がない。あるいは治療可能と考え温経湯を与え硫黄竜骨二味丸を兼用すると、旬余で腰中に温を覚え、汚水は減り、数ヶ月の後には経事が永断して尋常の老婦となった。
- 4) 40歳の妻女が小腹に塊があり、時に左脇下に衝いて痛み、経水不調、あるいは2～3ヶ月断じて一時に崩下し、心気鬱塞して飲食も減少した。温経湯を与え衝逆時には失笑散<sup>②</sup>を服ませると数旬で衝逆はやみ、小腹の塊は柔らかくなり経事も常に復した。後に時に血熱を發し、肩背強急、齒痛を發したが、小柴胡湯加地黄括蕪根を与えて全治した。
- 5) ある婦人が嫁いだ後数年間経水不調となり、たまに経事が来ると気宇が爽快でなく、そのたびに腰冷が甚だしく、小腹は拘急して按ずると塊癖がある。私は胞門虚寒と診て温経湯を与え、腰門八髻<sup>③</sup>に灸すると半年後初めて懐妊した。またこれより数年前、21歳の婦人の同証に、やはり温経湯を与え八髻に灸したところ、いくばくもなく懷孕し一男子を挙げた。古方の妙はこのように思議すべからざるものがある。
- 6) ある婦人が産後小腹に塊があり、按ずると痛みが腰脚に引き、時に悪心嘔吐、時に下利し、不食羸瘦してほとんど労状を呈した。主人が滋血消瘀の剤を与えたが治らなかった。私は胞門虚寒の証で真の勞ではないと診断し、温経湯を与えると数日で全癒した。また、ある婦人が腰冷してしばしば墮胎(流産)したが、温経湯を久服させると初めて胎児が育った。

[8] 南涯先生治驗／吉益南涯 (1750～1813年)〔門人記〕

18～19歳になる娘が、半年ほど前から鬱証となり満身に床につくこともできず、衆医の治療でも治らなかった。証はとかく上逆し、14椎の辺から肩頸へ凝りつけて、激しい時は痛み、湯水が皮中を上行するように思ひ、目がかすみ(ただし異物は見当らず、形は常態)、あるいは頭痛心下痞して飲食進まず、飲食すると心下に滞り、時には起つと腹から心下へ上衝し、あるいは朝から五つ半時までは腹脹微痛(諸症も昼からよりは朝が悪い)、時に煩熱(熱はなく、ただかつかと熱するような自覚があるのみ)、日によって手足の心がひりひりと煩熱する。また熱物を食するか冷えるかすると臍上が痛み、変ったものを食すると胸中がやけるように覚える。小便は通じがたく、茶色く濁って熱するように覚え、日によって大便も通じ難く、あるいは腰中寒となり、腹候すると腹中に少し動があるのみで塊物もなく、心下を按ずると痞し、日によって痛んだり痛まなかつたりする。当帰芍薬湯を200貼与え、大便が通じがたい時は消塊丸<sup>④</sup>、三黄丸<sup>⑤</sup>、大簇丸<sup>⑥</sup>の類を与え、煩熱の気味が終始あるため三物黄芩湯を与えるなどの手当てを施したが寸効もない。母親の言によれば、患者はこの病にかかる以前から、毎年2月と8月になると気短かで怒りっぽくなる。それがこの病の前兆であったのか、昨春から気鬱し、黙々として人に逢うことを嫌い、とかく上逆する傾向があった。去年は服薬を続けながら家で木綿を織るなど常人のように働いていたが、今年は少しやせ衰えて飲食も進まず、上逆も甚だしい。養生を第一としているが、床につくほどのことではない。また他人より初潮が遅く、以後半年ほどはあったが去年の9月に止まってからは少しもないという。このような症状の病人に温経湯をしばらく投じたところ、きわめて治効を奏した。

[9] 井見集 附録／山田業広 (1808～1881年)

30歳ばかりの婦人が帯下を患って3年、常に白い膿を下し、その臭気は鼻に徹し、腹中拘急し、脈微数で食は進まず、父(業広)が温経湯を投ずると大いに快方に向かった。その後大いに再発したので転じて腸癰湯<sup>⑦</sup>加附子を与えたという。父は私に「婦人の帯下で臭気を発するものは内部が腐敗しているからであり、助からぬと決めて間違いない」と教えた。

# 温経湯が著効を示した鼻アレルギー・頭痛・肩こりの一症例

A Case of Nasal Allergy with Headache and Shoulder Stiffness Effectively Treated with Unkei-to

粕田 晴之 赤澤 訓  
斎藤 仁 清水 禮壽

Haruyuki KASUDA Satoshi AKAZAWA  
Jin SAITO Reiju SHIMIZU

要旨 症例は38歳の女性で、11年来の鼻アレルギーで西洋医学的な治療を受けてきたが効果が得られず、漢方処方を目的として来院した。鼻閉、鼻汁、くしゃみ等の鼻アレルギー症状の他に足の冷え、肩こり、強い生理痛および生理時の頭痛を訴え、瘀血圧痛点を認めたため、理血薬の適応と判断した。当帰芍薬散の投与で鼻アレルギーは軽減したが肩こり、生理痛と頭痛は持続した。胸脇苦満があり、加味逍遥散に変更すると、肩こりは軽減したが鼻アレルギーは増悪した。花粉症の季節には口唇が乾燥するとのことで寒虚燥証の理血薬である温経湯に変更したところ、現代医療の点鼻液と点眼液から離脱でき、すべての症状、愁訴から解放された。鼻アレルギーに対しては小青竜湯が頻用されているが、特に本症例のごとく鼻アレルギー以外の症状を伴う場合には、証にあわせて適切な方剤を選択することが根本治療につながる道となると考えられた。

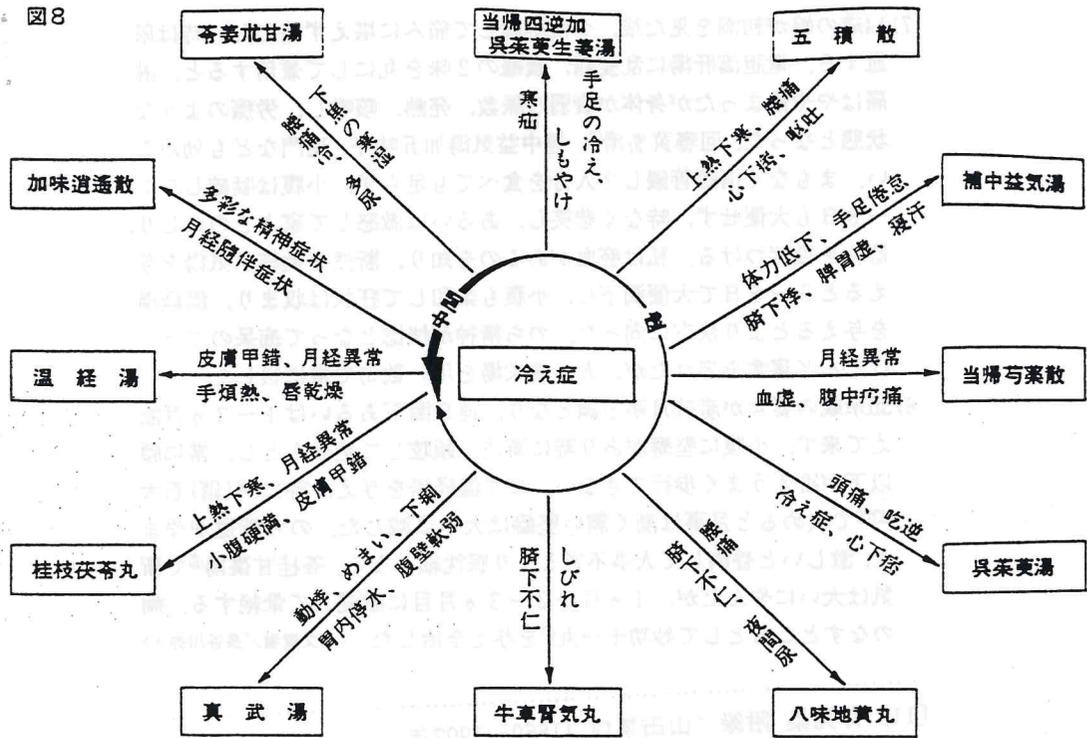
- 7) 14歳の娘が初潮を見た後、小便淋瀝して痛みに堪えず甚だしい時は尿血する。竜胆瀉肝湯に乱髮霜、蜜蠟の2味を丸にして兼用すると、淋痛はやや治まったが身体が衰弱し脈数、発熱、咳嗽し、勞瘵のような状態となった。回春黄耆湯<sup>④</sup>、補中益気湯加五味子、麥門なども効がない。まもなく消穀善饑し2人分を食べても足らず、小腹は凝結して7～8日も大便せず、時なく悲笑し、あるいは激怒して家人をののしり、器物を投げつける。私は瘀血があるのを知り、断然と桃核承気湯を与えると5～6日で大便潤下し、小腹も柔和して狂状は収まり、温経湯を与えるとより快方に向った。のち精神が恍惚となって痴呆のごとく、ほとんど寝食を忘れたが、人參養榮湯を用い数旬で常に復した。
- 8) 30余歳の妻女が産後月事不調となり、連日漏下あるいは1～2ヵ月断えて来ず、小腹に堅癥があり時に衝逆、頭眩して絶せんとし、常に腰以下が冷えうまく歩行できない。まず温経湯を与え、時に消(硝)石大円<sup>⑥</sup>で攻めると月事は漸く調い堅癥は大いに減じた。のち衝逆がやまず、激しいと昏倒して人事不省となり脈沈細となる。苓桂甘藶湯<sup>⑦</sup>で衝気は大いにやんだが、1ヵ月か2～3ヵ月目に激発して暈絶する。痾のなすところとして妙功十一丸<sup>⑧</sup>を与え全治した。〈文責者/長谷川弥人〉

## 〔11〕井見集 附録/山田業精 (1850～1907年)

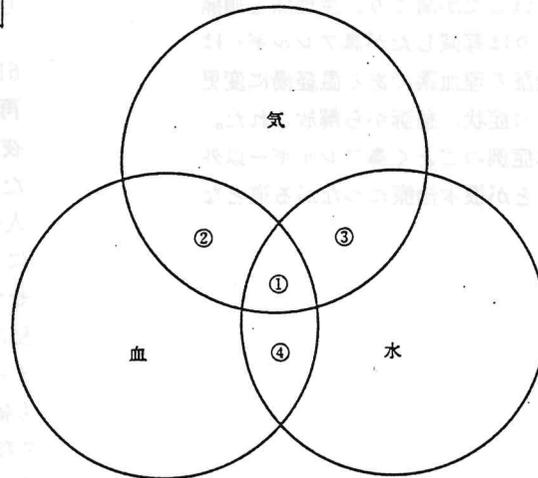
61歳の妻女が久しく赤白帯下を患い、服薬により一時治ったが、その後再び下血した。これも服薬でやんだが両脚および内股に水腫を発し、毎夜両脇へ逆痛を起し、大便は1日に3～4回泄瀉し、小便も赤渋した。ただし、食欲は平で気分も常とかわらない。往診すると、対応は無病の人のようである。脈は沈遅、舌は潤い、腹は大腹が軟らかで小腹の左方にまり大の軟塊があり、小腹はまったく満急している。寒熱はなく、渴せず、両脚の浮腫は軟らかで、手按するとくぼみ、すぐには戻らない。私は陰水として真武湯を投じたが吐して納まらず、吐水がやまず食欲がまったく絶し、両脇の急痛が倍加した。小半夏加茯苓湯を与えたがこれも納まらない。熟考を重ねたところ、これはすべて久瘀血のせいであって陰水ではないことが確認された。急ぎ温経湯を与えると、吐はまったくやみ逆痛もまた去り、食欲ももとの復した。吐水のため両脚の腫はいったん半ばを減じたが、吐がやむに伴い腫もまたもとの戻ってしまった。腹痛は温経湯で治ったが、夜になると必ず腹満に苦しみ両脚に逆満し、泄瀉はまったくやみ、小便もまた不利となった。よって前方に大調経散<sup>①</sup>を合し、逐瘀飲<sup>②</sup>の丸薬を用いると二便とも平のごとくになり、浮腫もまったく去った。

〈文責者/長谷川弥人〉

図8



漢方薬名	真武湯	牛車腎気丸	八味地黄丸	呉茱萸湯	当帰芍薬散	補中益気湯	五積散	当帰四逆加呉茱萸生姜湯	苓姜朮甘湯	加味逍遙散	温経湯	桂枝茯苓丸
体質	虚	虚	虚	虚	虚	虚	虚	虚	中間	中間	中間	中間
寒がり	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
腹部の冷えと痛み	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
腰冷		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下肢冷		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
手足の冷え・しもやけ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下痢傾向	○											
便秘傾向			○									○
多尿・頻尿			○							○		
頭痛	○			○	○	○	○	○	○	○		
貧血気味	○											○
皮膚のあれ												○
冷えのぼせ											○	
いろいろ・気分不安定					○			○		○		
倦怠感	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
月経異常			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○



- ① 健康な状態で三要素が十分にめぐっている状態。
- ② 「水」が停滞し、浮腫、鼻水などが現われる状態。婦人科領域では、妊娠中毒症による浮腫などがあるが、鼻アレルギー、腎疾、神経痛、めまいなど含まれる。
- ③ 「血」が停滞して瘀血の状態が現われる状態で末梢性循環不全や、月経異常をはじめ婦人科疾患の多くが含まれる。
- ④ 「気」が停滞し、興奮、運動障害、知覚異常が現われる。

## D. 産婦人科疾患と主な適応処方

1. 妊娠浮腫ならびに妊娠悪阻：
    - ◎五苓散（浮腫または水を飲むと吐く、のどが渇く） 中
    - ◎小半夏加茯苓湯（漢方の第一選択薬） 虚
  2. Taylor 症候群（骨盤内うっ血症候群，瘀血病）：
    - ・大黃牡丹皮湯（盲腸部に圧痛，抵抗） 実
    - ・桃核承気湯（反側に圧痛，抵抗） 実
    - ◎桂枝茯苓丸（両側に圧痛，抵抗） 中
    - ◎当帰芍薬散（顔色悪く，手足冷える） 虚
    - ・四物湯（皮膚の荒れ，唇が乾く） 虚
  - ③ 不妊症（排卵障害）：
    - ◎桂枝茯苓丸 中
    - ◎当帰芍薬散 虚
    - ◎温経湯（手がほてり，足が冷える） 虚
  4. 月経不順：
    - ・加味逍遙散
    - ・桃核承気湯
  5. 月経困難症：
    - ・加味逍遙散
    - ・安中散
    - ・桂枝茯苓丸
  - ⑥ 冷え症：
    - ・当帰四逆加呉茱萸生姜湯（しもやけ） 虚
    - ◎当帰芍薬散 虚
    - ◎温経湯 虚
  7. 更年期障害：
    - ・桃核承気湯 実
    - ◎桂枝茯苓丸（肩凝り） 中
    - ◎加味逍遙散（イライラ，気が沈む） 虚
    - ◎当帰芍薬散 虚
    - ・温経湯 虚
  8. 術後回復：
    - ◎小柴胡湯（口中不快） 中
    - ◎補中益気湯 虚
    - ◎十全大補湯 虚
  9. 肝機能障害（薬物性肝障害も含む）：
    - ・大柴胡湯 実
    - ◎小柴胡湯 中
    - ・柴胡桂枝湯 虚
  10. アレルギー性鼻炎（妊娠合併時など）：
    - ◎小青竜湯 中
  11. 膀胱炎：
    - ・猪苓湯
- (注) 容量は通常7.5g/3×14である。

## 月経不順に対するツムラ温経湯の効果

—排卵障害例に対する内分泌変動について—

大阪医科大学産婦人科学教室

後山尚久、坪倉省吾、井本広済、山下英俊、岡崎 審、杉本 修

### ●はじめに

最近、月経不順とくに排卵障害に対して温経湯の効果が注目されている。

そこで本研究では、排卵障害例に対する温経湯の効果およびその作用機序を検討する目的で、温経湯投与による経日的なホルモン値の変動とゴナドトロピンの律動性分泌パターンを検討した。

### ●対象と方法

対象は、大阪医科大学産婦人科内分泌外来を訪れた排卵障害患者のうち、第1度無月経4例(平均年齢23.2±1.8歳)、第2度無月経5例(平均年齢22.4±3.5歳)である。これらの症例には高プロラクチン血症や体重減少を伴った症例は含まれていない。これらに消退出血の7日目からツムラ温経湯エキス顆粒(医療用)7.5g/日を10週間投与した。

上記症例に対しホルモン測定のため、薬剤投与前と原則として治療中2週間ごとに採血した。また消退出血の2-6日目、投与終了時に15分間隔で3時間にわたり採血し、血中LH、FSH、estradiol (E<sub>2</sub>)値について測定し検討した。

### ●結果

#### 1. 排卵障害例に対する温経湯投与中の血中ホルモン値の症例別の推移(図1)

血中LH値は第1度無月経においては1例で投与2週目で2.6倍(7.8mIU/mlから20.4mIU/ml)に上昇したが、第2度無月経では1例を除き投与2-4週目で徐々に上昇した。

血中FSH値は第1度無月経例においては2例で、それぞれ投与2週および4週目に増加したが、その後投与前値まで下降した。その他の2例は、投与6-8週目にやや上昇した。

第2度無月経例では投与2週目で全例が増加し、その後はほぼ同じレベルを維持した。

血中estradiol値は第1度無月経例は一定の傾向を示さなかった。

第2度無月経例は投与前は全例25pg/ml以下であったが、投与2週目より徐々に増加し投与8週以後では全例が25pg/ml以上の値を示した。

温経湯投与前22.9pg/mlのestradiol値を示した例は投与6週目に59.0pg/mlの値を示し、7週目に排卵した。

#### 2. 排卵障害例に対する温経湯投与によるホルモン値の経日的変化(図2)

温経湯投与前、投与4週目、投与8週目の血中LH、FSHおよびestradiol値の平均値を比較したところ、第1度無月経例では、投与4週目より血中FSH、LH値は増加したが、症例によるバラツキが大きく、有意差はなかった。血中estradiol値も有意差はなかった。

第2度無月経例では、血中LH値は有意差がなかったが、血中FSH値は投与4週目、8週目で有意に増加した。

また、血中estradiol値は投与4週目で有意に増加し、8週目においても増加したが統計的な有意差はなかった。

#### 3. 温経湯投与による排卵障害例のゴナドトロピン律動性分泌の変化

9例の排卵障害例に対し温経湯投与前および10週間の投与後にゴナドトロピンの律動性分泌のパターンを比較した。

第1度無月経例では、温経湯投与前は4例中3例に1-4回/3hのLHの律動性分泌が認められた。FSHの律動性分泌は認められなかった(図3)。

投与後LHの律動性分泌において、4例中2例に基礎値の上昇があり、2例に頻度の増加(1回/3h)があった。投与前に律動性分泌があった3例のうち2例は振幅の増加を示した。

FSHの基礎値は投与前はさまざまであったが、投与後これら4例のうち、3例に上昇を認めた。また1例に律動性分泌の出現を認めた。

第2度無月経例では、FSHの基礎値は全例で増加し、律動性分泌のみられなかった4例中2例に1回/3hの頻度で出現した(図4)。LHの律動性分泌の基礎値は温経湯投与により5例中1例のみ増加した。しかし投与前に律動性分泌をみとめなかった4例すべてに1-2回/3hの頻度で出現を認めた。投与

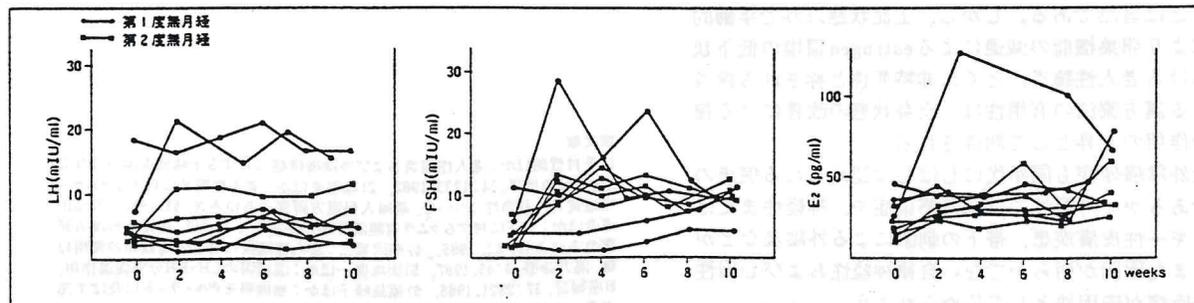


図1 排卵障害例の温経湯投与後の血中ホルモン値の症例別の変動

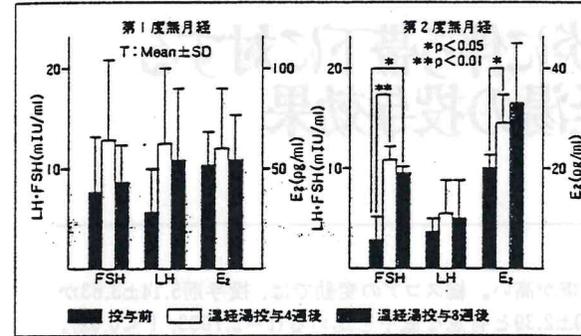


図2 排卵障害例に対する温経湯投与による血中ホルモン値の経日的変化

前に律動性分泌のみられた例ではその基礎値はやや低下したが、頻度は2回/3hと増加した。

#### 4. 治療成績(まとめ)

本剤の投与により、第1度無月経例では4例中1例が排卵し、排卵をみなかった3例中2例には血中estradiol値の増加が認められた。すべてのホルモン値に変動が認められなかったのは1例のみであった。

第2度無月経例では5例全例にestradiolの分泌を認め、1例に排卵、2例に無排卵性の出血を認めた。

### ●考察

温経湯は月経不順、月経痛などに効果があり性機能賦活作用があるともいわれている<sup>1)</sup>

三宅ら<sup>2)</sup>は、間脳下垂体遠流実験で、温経湯がLHの放出を増加させることを認めている。一方、Taketani<sup>3)</sup>らはラットの下垂体培養細胞系での実験で温経湯がLHおよびFSHの産生、放出を増加させ、プロラクチンの分泌を抑制させることを報告している。

臨床的な検討としては、視床下部性の排卵障害のうち、clomiphene無効例に対し、温経湯を併用したところ、約45%に排卵誘発効果がみられたことを吉本<sup>4)</sup>らが報告している。

最近、ゴナドトロピンの律動性分泌が排卵に大きく関与することが報告されるようになった<sup>5)</sup>。そこで、温経湯のゴナドトロピンの律動性分泌に対する影響を検討した。

その結果、第1度無月経4例においてFSHの基礎値の上昇が3例、律動性分泌の出現が1例にみられた。またLHの基礎値の上昇が2例、律動性分泌の頻度の増加が2例、振幅の増加が2例にみられ、何らかの形で全例に律動性分泌の改善を確認できた。

一方、第2度無月経5例においては温経湯投与によりFSHの基礎値の増加が全例にみられ、律動性分泌の出現も2例にみられた。

また、LHの基礎値の増加が1例、律動性分泌の出現が4例、および頻度の増加を1例に認め、全例に律動性分泌の改善を認めた。

このようにゴナドトロピンの律動性分泌は、ほぼ全例に改善され、とくに第2度無月経では温経湯投与2週間で血中FSH値が著明に増加し、その値を維持し、estradiol値が徐々に増加した。このことから、温経湯は間脳からのLH-RHの分泌あるいは下垂体のLH-RHに対する反応性を生理的狀態に移行させる可能性があると考えられた。

また、今回の10週間の温経湯単独投与で22.2%の排卵率を得たが、第2度無月経例で全例に血中estradiol値の増加をみたのは特筆に値すると思われた。

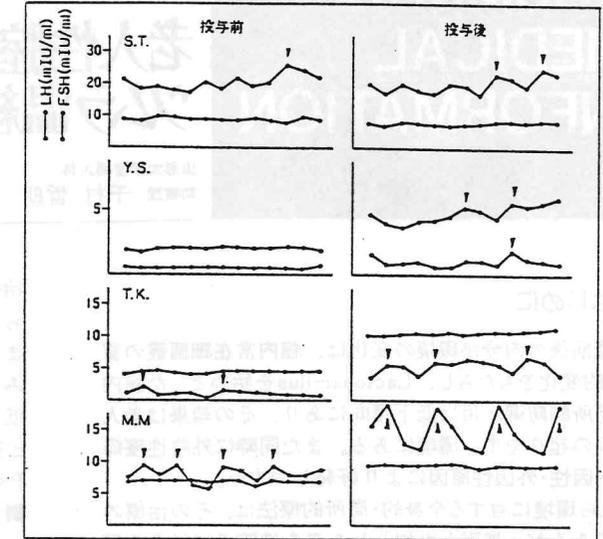


図3 温経湯投与前・投与後の第1度無月経例のゴナドトロピンの律動性分泌パターン

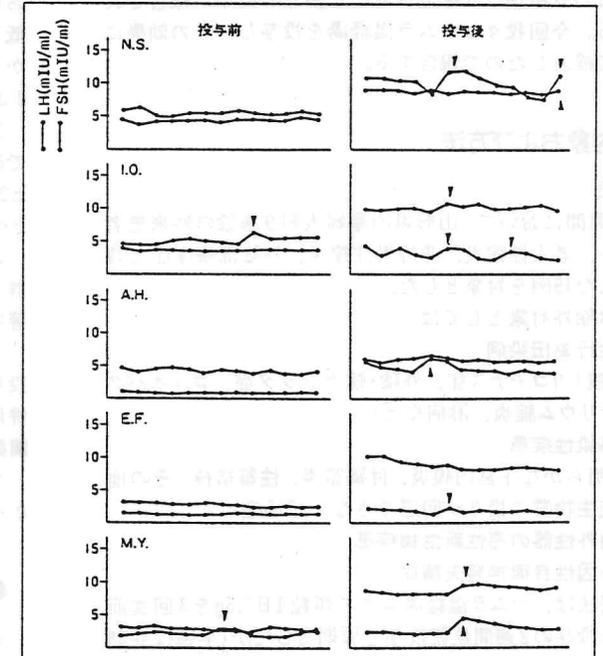


図4 温経湯投与前・投与後の第2度無月経例のゴナドトロピンの律動性分泌パターン

以上、排卵障害例に対する温経湯の作用機序としてゴナドトロピンの律動性分泌パターンを改善し、間脳・下垂体・卵巣系を正常化する可能性が考えられた。今後卵巣に対する直接作用についても、さらに検討していく必要があると考える。

(本研究の詳細は日本不妊学会誌35巻1号に掲載予定である)

#### 参考文献

- 1) 楠原浩二, 他: 未婚の排卵障害婦人に対する温経湯の効果. 産婦人科漢方研究のあゆみ, 1: 17, 1984
- 2) 三宅 侃, 他: 間脳-下垂体遠流システムによる温経湯のLH分泌機構の検討. 産婦人科漢方研究のあゆみ, 2, 105, 1985
- 3) Taketani, Y. et al.: Action of Unkeito (TJ-106) on cultured rat pituitary cells. In recent advances in the pharmacology of KAMPO (Japanese herbal) MEDICINES: p184, Excerpta Medica, Amsterdam-Princeton-Hongkong-Tokyo-Sydney, 1988
- 4) 吉本泰弘, 他: Clomiphene 無効の無排卵症に対する温経湯-Clomiphene 併用効果. 産婦人科漢方研究のあゆみ, 5: 40, 1988
- 5) Bohnet, H.G. et al.: Hyperprolactinemic Anovulatory Syndrome. 42: 132, 1976

温経湯のLH-RH分泌促進作用  
-田坂 慶一-

生薬: \_\_\_\_\_  
成分: \_\_\_\_\_  
処方: 温経湯

雑誌名: \_\_\_\_\_ 37巻 1985年 12号 \_\_\_\_\_頁 通算 \_\_\_\_\_頁

報告: 実験 標的器官: 内分泌・代謝系  
剤形: エキス剤 投与経路: 動物経口 投与量: 5.00ug/ml

併用薬: \_\_\_\_\_

内容: ①温経湯の生薬成分において牡丹皮にLH分泌促進作用が認められた。②温経湯は視床下部に作用しLH-RHの分泌を亢進させ、このLH-RHが下垂体からのLHの分泌を促進させる事が明らかになった。  
参照: 日本産科婦人科雑誌

寒冷性妊孕能低下についての考察  
-今泉 英明-

生薬: \_\_\_\_\_  
成分: \_\_\_\_\_  
処方: 温経湯、当帰芍薬散加紅参

雑誌名: 現代東洋医学 \_\_\_\_\_ 12巻 1991年 1号 340頁 通算 \_\_\_\_\_頁

報告: 治療例 標的器官: 泌尿器・生殖器・肛門  
剤形: \_\_\_\_\_ 投与経路: ヒト経口 投与量: \_\_\_\_\_

併用薬: プロゲステロンデポ、クロミフェン

内容: 症例報告: 卵管性不妊症(28歳、女) 続発性不妊症(33歳、女) 寒邪が妊孕能に与える影響を推測し、上記の処方と排卵誘発剤を用いて効果を認めた。  
参照: 難病、難症の漢方治療第4集(臨時増刊号)

無排卵モデルラットに及ぼす漢方薬の効果  
-福島 峰子-

生薬: 甘草  
成分: \_\_\_\_\_  
処方: 当帰芍薬散、桂枝茯苓丸料、温経湯、芍薬甘草湯

雑誌名: 産婦人科漢方研究のあゆみ \_\_\_\_\_ 1巻 1986年 1号 85頁 通算 \_\_\_\_\_頁

報告: 実験 標的器官: 泌尿器・生殖器・肛門  
剤形: エキス剤 投与経路: 動物経口 投与量: 150.00mg/day

併用薬: Testosterone propionate(T.p.), Sulpiride

内容: ①甘草、温経湯、芍薬甘草湯は、T.P.投与ラットの内分泌的変動、LH、FSHの変化を調整する方向に作用した。②Sulpiride投与高アロラクチン血症ラットでは、甘草、温経湯、芍薬甘草湯PRLの低下を認めtestosteroneは下がり、estradiol, progesteroneは有意に増加した。

幼若メスラットおよび成熟去勢メスラットの内分泌動態に対する温経湯の作用  
-左雨 秀治-

生薬: \_\_\_\_\_  
成分: \_\_\_\_\_  
処方: 温経湯

雑誌名: 産婦人科漢方研究のあゆみ \_\_\_\_\_ 巻 \_\_\_\_\_年 3号 109頁 通算 \_\_\_\_\_頁

報告: 実験 標的器官: 内分泌・代謝系  
剤形: エキス剤 投与経路: 動物経口 投与量: 50.00mg/100ml

併用薬: \_\_\_\_\_

内容: 温経湯は、幼若メスラットでゴナドトロピン値増加の時期を早め、又成熟去勢メスラットにおいては、FSH値の増加を抑制作用を有する事が示唆された。

温経湯のゴナドトロピン促進作用  
-谷澤 修-

生薬: \_\_\_\_\_  
成分: \_\_\_\_\_  
処方: 温経湯

雑誌名: 漢方と最新治療 \_\_\_\_\_ 1巻 1992年 1号 75頁 通算 \_\_\_\_\_頁

報告: 治療例 標的器官: 泌尿器・生殖器・肛門  
剤形: エキス剤 投与経路: ヒト経口 投与量: 5.00g/day

併用薬: クロミフェン

内容: ①温経湯を排卵誘発剤であるカミフェン無効症例に併用した結果、約45%に排卵誘発効果が認められた。②温経湯はJ\*H\*系に促進的に作用し又排卵障害例に対する治療薬として使用出来る事が報告された。

Clomiphene無効の無排卵症に対する温経湯-Clomiphene併用効果  
-吉本 泰弘-

生薬: \_\_\_\_\_  
成分: \_\_\_\_\_  
処方: 温経湯

雑誌名: 産婦人科漢方研究のあゆみ \_\_\_\_\_ 巻 1988年 5号 40頁 通算 \_\_\_\_\_頁

報告: 治療例 標的器官: 泌尿器・生殖器・肛門  
剤形: エキス剤 投与経路: ヒト経口 投与量: 7.50g/day

併用薬: クロミフェン

内容: 症例報告; 無排卵症に対してクロミフェンと温経湯を併用する事によりクロミフェンの作用が增强される事が報告された

未婚女性の続発性無月経に対する温経湯の効果  
-林 知恵子-

生薬: \_\_\_\_\_  
成分: \_\_\_\_\_  
処方: 温経湯

雑誌名: 漢方と最新治療 \_\_\_\_\_ 1巻 1992年 3号 \_\_\_\_\_頁 通算 266頁

報告: 治療例 標的器官: 泌尿器・生殖器・肛門  
剤形: エキス剤 投与経路: ヒト経口 投与量: 7.50g/day

併用薬: クロミフェン

内容: ①対象: 266例 期間: 2ヶ月②結果: 温経湯は1) LH, FSHの産生放出を亢進させPRLの分泌を抑制した2) 血中 FSH, LH値は投与前より投与後が増加し血中PRL値は投与後に低下した3) 正常域外のJ\*H\*値を正常化した4) 血中J\*H\*値の変化に関しては、LH及びFSH共に上昇傾向を示した

ツムラ温経湯による更年期障害の治療  
-佐藤 昌平-

生薬: \_\_\_\_\_  
成分: \_\_\_\_\_  
処方: 温経湯

雑誌名: 漢方医学 \_\_\_\_\_ 15巻 1991年 9号 20頁 通算 312頁

報告: 治療例 標的器官: 泌尿器・生殖器・肛門  
剤形: エキス剤 投与経路: ヒト経口 投与量: 7.50g/day

併用薬: \_\_\_\_\_

内容: ①対象: 更年期障害患者20例 期間: 30日②結果: 温経湯の有効性と安全性について検討した結果、更年期障害の各自覚症状に対し53.3~82.4%の改善度を示し、患者に対する全有効率も85%であった③副作用: 3例に体重の増加が認められたが安全性には問題は無いものと考えられた